

ブログ「野次馬雑記」連載

連載64 1969年1月 東大安田講堂攻防戦 その1



今年は1969年1月の東大安田講堂攻防戦から40年。当時、私は都立高校の3年生。受験勉強の合間に、テレビのニュースで東大や御茶の水の解放区の様子を見ていた。

そんな訳で現場には行っていないが、40年の節目ということで、このブログでも安田講堂攻防戦や神田解放区闘争に関する当時の新聞記事や週刊誌の記事を2ヶ月にわたって紹介してみたい。

当時を知らない世代の方にも分かるように、まず

は、安田講堂の占拠から機動隊導入による攻防戦に至る経緯を週刊誌の記事で見よう。今回は全文を紹介する。

【安田講堂籠城日記 202日間彼らはそこで何をしていたか】

サンデー毎日 1969. 2. 20増刊号

『東大紛争のシンボル、安田講堂が2日間の攻防戦の末、1月19日午後5時45分、ついに落ちた。昨年7月2日全学共闘会議の学生によって再封鎖、占拠されてから実に202日ぶり。同講堂はすっかり変わり果てた姿で再び東大当局の手に戻された。』

安田講堂は東大の長年のシンボルだったが、今度の紛争を通じて、それは「1968年解放講堂」として全国の反日共系学生の象徴に変わった。安田講堂の占拠なくして、東大闘争はありえなかったし、安田講堂ぬきに東大闘争を語ることも出来ない、と学生たちはいまでも誇らし気に語る。事実、東大闘争全学共闘会議にとって、“解放講堂”は統合参謀本部であり、便利な宿舎であり、安上がりの総決起会場であり、そして連帯を深めるメッカでもあった。それだけになによりも死守しなければならない“砦”となったのだ。

<始めに医学部全学闘>

43年6月15日

医学部全学闘の学生約100人が反日共系学生の支援を受けて安田講堂占拠にふみきった。午前5時、学生たちは全員ヘルメットに角材、覆面姿で講堂正面玄関の鉄扉をおしあけて乱入、警戒のために泊り込んでいた約50人の職員を追い出して時計塔の屋上に数本の赤旗をひるがえした。1月から闘争にはいつていた医学部全学闘は「青医連公認」「医学部不当処分撤回」など3項目を要求し、大学側がこれを受け入れない場合は安田講堂を占拠すると事前通告していたのだが、大学側の権威の象徴だった時計台を学生に占拠された大河内総長ら東大当局の驚きと怒りは大きかった。

6月17日

午前4時半、大河内総長は警視庁機動隊の出動を要請。1,000人の機動隊が構内にはいり、占

抛学生はこの動きをみて事前に撤退した。しかしこの抜き打ち的な機動隊導入に対する学内の反発は想像以上に激しく、それまで医学部の闘争に無関心だった一般学生までが大学非難の声をあげはじめた。

6月20日

あっという間に“全学スト”が成立、抗議集会が安田講堂前で開かれた(筆者注:写真は「毎日グラフ」から転載)。13,000人余の学生のうち半数近い6,000余人が参加、安保以上の盛りあがりだった。大学院有志が「全闘連」を結成し、無期限ストを呼びかけた。

6月28日

事態の意外な進展にあわてた大学当局は、“全学集会”開催にふみきった。病院からぬけ出して出席した大河内総長は学生を満足させるどころか、かえって不満と怒りを高めるという皮肉な結果を招いた。

7月2日

全闘連、反日共系各派の約200人が午後9時前、安田講堂の再占拠にふみきった。「大学と学生との対決点を明確にし、闘争の方向性を決める意図で行った」と封鎖後の記者会見で説明されたが、わかりやすく言えば、夏休み中、闘争がしぼんでしまうのを防ぐため“闘いの拠点”を作り、物質化しようというわけだった。

占拠学生は今度は少数派ではなかった。各学部の学生大会で封鎖支持決議があいついで可決された。こういう勢いに乗った時の学生たちは“ブレーキ”もよくきく。「ものをこわさずバリをつくれ」「私物には手をつけるな」「革命軍の規律を守れ」「整理整頓」などの指令が出され、学生たちの表情は明るかった。講堂内はむし暑く、蚊の襲撃に悩みながら学生たちは交代で仮眠をとった。クツをはいたまま、ゲバ棒片手にフトンにもぐりこむという緊張ぶり。

講堂内で基など打っている学生がいると「たるんでいる」とつるしあげられたりした。まだ全学共闘会議も、7項目要求もなかった。

<全学共闘会議を中心に>

7月5日

閉ざされた講堂の門が初めて一般学生に“開放”され、3,000人を越す学生を集めて全東大集会が開かれた。封鎖反対の声がかげをひそめ、「打開策もとらず。雲がくれした当局者を交渉の場に引出すためにはやむを得ない手段」という声が圧倒的。

席上、学生たちは「東大全学共闘会議」を結成。』(つづく)

ホームページの「新左翼党派・全共闘機関誌」コーナーに東大全共闘機関誌「進撃」を載せていますので、併せてご覧ください。

次回もこの記事の続きです。

連載65 1969年1月 東大安田講堂攻防戦 その2



前回に引き続き、安田講堂の占拠から機動隊導入による攻防戦に至る経緯を週刊誌の記事で見てみよう。

【安田講堂籠城日記 202日間彼らはそこで何をしていたか】サンデー毎日 1969. 2. 20増刊号

『夏休み

レジャーに、旅行にと遊び回る学部学生や「全学連」大会などで忙しい各セクトの活動家に代わって、ノンセクトの大学院生が中心となり、交代で“講堂番”。むし暑い講堂内を避けて講堂前広場には“支援テント”が10張以上誕生。“ノンポリ・テント村”と呼ばれた。

7月15日、各学部、学科代表、大学院代表、反日共系全学連各派代表などが集まって共闘会議代表者会議を開き、「7項目要求」が正式に決定され、闘争目標が明確になった。名物“時計台放送”が始まったのもこのころからである。

夏休み中、“闘いの火”を消さぬことが当面の課題。このため毎週火曜日を登校日と決め、講堂内で集会を持たれた。黒田寛一、岩田弘氏ら各派の理論指導者やイタリア・フィレンツェ大学の助教授の講演会が開かれたり、あるいは“闘う労働者、市民、高校生”のためにも解放され、“反戦、反安保集会”が盛んに開かれた。

学生たちは彼らの講堂を「1968年解放講堂」と呼ぶようになった。フーテン大会が講堂前で開かれようとして一騒動が持ち上がったのは、夏休みも終わろうとしていた8月24日夜のことだ。

9月—10月

夏休み明けとともに安田講堂の全学共闘派は活発に動き出す。オルグ活動は学生間に浸透し、各学部でつぎつぎと無期限ストに突入。10月12日最後の法学部もストに入り全学無期限スト体制が確立された。講堂の1・2階に並ぶ大小10数の部屋がつぎつぎに各学科やセクトの“部屋”として使われていく。総長室は各グループの代表者会議—全学共闘の最高決定機関—を開く時にだけ使用された。各学部学科の闘争委、院生の全闘連、助手共闘そしてML、反帝、フロント、革マルなどの各セクト、複雑な組み合わせからなる共闘会議の意思を決定する際、安田講堂は最適の“統合参謀本部”であった。指令1つですぐ各グループ代表が総長室に顔を合わせ、代表者会議、事務局会議が連日開かれた。

学生たちは余裕をもちだした。マクラもとにゲバ棒はおいたが、ヘルメットをぬぎ、ジャンパーをぬいで汚れた貸しぶとんにもぐりこんだ。各学部のバリケードの中に寝に帰る学生も多く、講堂で泊るのは30人余りだった。

電気もガスも水道も使えた。泊まりこみ組は各室の電熱器でインスタントラーメンやインスタントコーヒーをつくった。時どきは正門近くの食堂や喫茶店へでかけた。電話も昼間は大学の交換台が安田講堂をよんでくれた。大学側に盗聴されているらしいと学生たちはこの電話ではさしさわりの

ない用をたし、闘争の連絡には赤電話やレポを使った。各学部のバリケード内との緊急連絡用に工学部学生は安田講堂から構内専用電話をひいた。

<革マルと反帝学評が対立！>

11月18日

紛争收拾を図ろうとする新執行部の加藤学長代行は全学共闘との公開予備折衝にのぞむため、はじめて学生の占拠する安田講堂にはいった。大講堂は共闘会議のシンパや一般学生約4,000人で超満員。壇上の共闘会議派幹部が7項目要求をつきつけて激しく加藤代行を追及。加藤代行の答弁は学生を満足させず、最後は「帰れ、帰れ」の大合唱で講堂を追い出された。全学共闘はこれ以上大学当局と話し合うことはムダだと判断した。

11月22日

全学共闘は全国の反日共系活動家8,000人を安田講堂前に集めて東大・日大闘争勝利総決起集会を開く(筆者注:写真は「毎日グラフ」から転載)。安田講堂は時計台上に数本の赤旗がひるがえりバルコニーには社学同、ML、革マル、反帝の各セクトの旗がかかげられた。中核もはじめてセクトとして東大闘争に参加した。この日を境に安田講堂のバリケードは一段と強化された。集会に参加した日大全学共闘の猛者たちは東大生のひ弱な“バリ造り”を笑い、日大生の指導で正面玄関のバリケードの“改造”がはじまった。

五分板をうちつけ内側にはスチールロッカーをぎっしりつめ、一ヶ所あけた入口も30秒あればいくつものロッカーが上からおちてきて開かずの扉となるしかけ。闘う工学部大学院生たちの“バリケード工学”は日ましに進歩した。

武装した“外人部隊”の出入りで安田講堂の空気も殺気立った。反日共系のゲバルト部隊は、これも構内の教育学部を根拠地とする日共系ゲバ部隊とにらみあったが、この日は結局、激突を回避した。封鎖を拡大して全学バリケード封鎖をするかどうかで代表者会議はもめた。

革マルと反帝学評がお互いに相手を日和見主義者と非難しあって対立、共闘会議の頭痛のタネとなった。』(つづく)

盗聴されている電話は声が聞きづらかったり、カタカタという変な音が聞こえたりというような「症状」が出るといわれていた。次回もこの記事の続きです。

連載66 1969年1月 東大安田講堂攻防戦 その3



前回に引き続き、安田講堂の占拠から機動隊導入による攻防戦に至る経緯を週刊誌の記事で見よう。

【安田講堂籠城日記 202日間彼らはそこで何をしていたか】サンデー毎日 1969. 2. 20増刊号『12月

寒くて長い闘争になった。各部屋に石油ストーブ

がはいった。ヘルメットをぬいだ学生たちはストーブをかこみ、東大闘争の本質論から文学論、人生論に花をさかせた。学生会館のない本郷キャンパスのここは唯一の学生会館だったのかもしれない。日共系＝民青系と一般学生が連合して闘争收拾へ動き、共闘会議派は孤立を深めた。

東大生は家庭教師のアルバイトをしているものが多い。バリケードの中から背広にかえて交代でバイトにも行く。構内でにらみあう日共系のゲバルト部隊との小ぜり合いは続いたが、安田講堂の12月はわりと平穏だった。機動隊の導入も年内はまず予想されずとあって“正月休戦”ムード。大晦日には時計台放送がベートーベンの第九を流したりした。

正面玄関にヘルメットとゲバ棒で「賀正」の飾りをつけ、学生たちはゆく年くる年を安田城の中で祝った。

友人や肉親、また近所の商店主などがさし入れをもって年賀にきた。女子学生に手伝ってもらってぞうにをつくって食べた。

久しぶりに銭湯にも行った。「年が明ければいずれ機動隊と決戦さ」学生たちはつかの間の休みをくつろいだ。

<民青への攻撃開始>

1月9日

大学当局と日共系、一般学生との闘争收拾工作は着々と進み、共闘会議は苦境にたつた。日共系は教育学部に“外人ゲバ部隊”を常駐させ、共闘派の封鎖を實力で解除しようとする動きを見せた。

「非妥協的に闘いぬくほかない」強硬なノンセクト・ラジカルズの突き上げに各セクトが足なみをそろえ、全共闘は「闘争の圧殺者、民青を實力粉砕」という強硬方針をうち出した。機動隊導入の危険をあえておかしても学内の民青勢力を攻撃する。全都から動員した数千人の反日共系ゲバ部隊は安田講堂から教育、経済学部へなだれこんだ。激しい流血の乱闘(筆者注:写真は「サンデー毎日」から転載)。午後8時機動隊が導入され、構内をかけぬけて安田講堂前に集結した。安田城攻撃か。講堂の中は緊張したが、機動隊は、催涙ガスを乱射しただけで撤退した。

本格的な機動隊による攻撃はもう時間の問題となった。全学共闘も外人部隊数百人を常駐させ、徹底抗戦の備えを固めた。

「ものをこわさずにバリを造れなんて甘い甘い」と応援部隊からハツパをかけられ、講堂内の破壊が始まった。バリケードを強化し、投石用の弾丸をつくるためである。階段や手すりの高価な大理

石がつぎつぎとはがされ、それを打ち砕く、どすんどすんという音が終日講堂内にひびいた。「われわれは武器にはことかかない。なにしろ講堂のすべてが石でできているのだから」と幹部の1人は笑った。工学部学生もバリケードをセメントで固めるなど防備強化にチエをしぼった。

安田講堂の中はすっかり変わり荒れ果てていった。「私物に手をつけるな」「火の用心」「便所にすいがらをおとすな」など、よく守られてきた“革命軍の規律”も決戦を前に無視されるようになった。「列品館のあの機械だけは手をつけなくてくれよな」工学系の学生がセクトの代表に頼んでいる。

1月10日

午後11時。とつぜん現われた民青の大ゲバルト部隊800人が隊列をととのえて安田講堂に攻撃をかけた。講堂内の守備部隊は30人余り。主力は同夜行われた共闘会議派の駒場の民青攻めに参加していた。民青系はそのすきをついたのだ。新式の投石器などをつかって講堂正面に石の雨をふらせ、突撃部隊がかん声をあげてつっこんだ。共闘会議派もバルコニーの上から投石で反撃、火炎ビンを初めて使った。かなりの負傷者を出した民青系は午前2時攻撃を中止。

講堂正面のガラス窓はほとんど破れたが守備隊は無傷。安田城の堅固さが改めて証明された形になった。』(つづく)

明大では東大のように民青系学生と衝突することはほとんどなかった。1969年、和泉では第3校舎のロビーが民青系の集合場所となっており、時々、学生会(社学同)の部隊が第3校舎ロビーの棚を搜索して民青系のビラを押収していた。

70年安保終了後の運動が停滞していた時期、中庭で民青系の集会が開かれることはあったが、衝突することはなかった。

しかし、本校(神田・駿河台)地区では中大が民青系の拠点となっていたこともあり、71年頃、中大から出てきた民青系デモ隊と、明大4号館に集結していた反日共系部隊が衝突し、ケガ人が出たこともあった。今回はこの記事の最終回です。

連載67 1969年1月 東大安田講堂攻防戦 その4



安田講堂攻防戦の第4回となるが、前回に引き続き、安田講堂の占拠から機動隊導入による攻防戦に至る経緯を週刊誌の記事で見てみよう。

【安田講堂籠城日記 202日間彼らはそこで何をしていたか】

サンデー毎日 1969. 2. 20増刊号

『＜自由意志で去る者と残る者＞

1月15日

闘争勝利労学総決起集会。安田講堂前は11・22について再び数千の反日共系学生、支援の青年労働者で埋め尽くされた。安田講堂に残って、全員逮捕を覚悟で戦う籠城部隊は約400人と決まった。東大全共闘も約150人近くの籠城組を決めた。

全共闘は今後の闘いのために活動家の半数以上を温存し、機動隊導入のさいは講堂から撤退させることにした。

講堂に残るか出るかの任務分担は上からの指令でなく、各グループごとに話しあい、すべて納得づくで決められた。家庭の事情、身体の調子が考慮に入れられ、個人の自発的意思が尊重された。講堂をでるものに、戦線離脱者としての後ろめたい気持ちはまったくなかった。むしろ外へ出る組にはこれからもつらい苦しい戦いが待っている。学生たちは長い闘争にすでにかかなり消耗していた。籠城して戦えばともかくそこで一区切りつく、疲れた学生たちの頭にはそんな考えすらあった。

籠城組に決まった者は逮捕に備えて身辺を整理した。長年、家庭教師をやってきた教え子に、しばらく会えないからと後任を見つけに走るものもいた。

籠城組の“解放講堂死守”戦術は何度もの代表者会議で確認されていた。圧倒的な機動隊の攻勢にできる限り長く抵抗すること。警察側の持久戦法も想定して10日間は籠城できるような体制をとったが、全面的な攻撃に対してせめて1日間は持ちこたえたいと幹部は考えていた。そして500人が10日間は持ちこたえるくらいの食料が運び込まれた。米、ニギリメシ、パン、インスタントラーメン、カンパン、ミカン・・・時計塔の一部屋が食料庫にあてられた。ガス、水道、電気が断たれるのを覚悟して飲料水、石油、ロウソクも容易され、炊事、医療班として女子学生10余人も籠城組に加わった。

バリケードも考えられる限りの補強をした。1階の窓や出入口は多すぎて、完全防衛はとても不可能なこと。したがって、1階が破られることは覚悟したが、要は5つの階段をがっちり固め、2階以上に機動隊を上げなければいいのだ。

階段という階段にはロッカーや机がぎっしりと積み上げられ、太い針金でしばりつけられた。そのうえ、スキマにはセメントを流し込み、コンクリート固めしたうえで、文字通り“砦”とする予定だったが、これだけは資金不足と時間不足で十分なことはできなかった。

代わりに火炎ビン、硫酸、塩酸などが用意された。バリがこわされたあとも、これらを投げつけ、機

動隊を寄せつけないための“時間かせぎ武器”だ。

2階から3階へ階段も同じように固められた。したがって2階防衛班は1階からの階段が陥落したらもう逃げるところはない。“退路”を断ったうえでの徹底抗戦の構えだ。3階、4階組も同じ。窓という窓にはベニヤ板が2枚、3枚と重ねて打ち付けられた。ビニール・テープで十分な目張りも行われた。催涙ガスへの備えも一応は十分である。

1月17日

午後11時5分、加藤総長代行名で退去命令がだされた。いよいよ機動隊との対決の時がせまった。安田講堂の出入りが激しくなり夜明けまで続いた。「がんばれよ」「お前もな」残る者、去る者、それぞれが目顔であいさつし、短い言葉を交わして別れていく。

最後の時計台放送アピール「われわれの戦いは勝利だった。全国の学生、市民、労働者の皆さん、われわれの戦いは決して終わったのではなく、われわれにかわって戦う同志の諸君が再び解放講堂から時計台放送を行う日までこの放送を中止します。」(了)』

(筆者注:写真は「毎日グラフ」から転載)

4回にわたって紹介してきた「安田講堂籠城日記」はこれで終了した。一部の引用ではなく、掲載された記事全文を紹介したのは、あの時代を知らない世代の方々にも、安田講堂攻防戦に至る状況が良く分かる資料と考えたからである。

また、籠城したのは特別な人間ではなく、普通の学生だったことが分かると思う。

当時、「朝日ソノラマ」という雑誌で「音で残す永遠の歴史・激動の東大1／18・19」という特集があり、雑誌に付いていたソノシート(ビニールで作られたレコードのようなもの)をレコードプレーヤーにかけて、最後の時計台放送を聞いていた記憶がある。

この「朝日ソノラマ」という雑誌は「音の雑誌」ということで、「生きているゲバラの演説」(1964年国連演説)とか、「新宿広場'69」(歌うフォークゲリラ)など、毎回左翼系の特集を掲載していた。

当時の「朝日ソノラマ」は古本サイトでも見つからないので、多分入手不能。

今回は1969年1月17日から1月19日までの安田講堂攻防戦をめぐる新聞記事を紹介합니다。

連載68 1969年1月 東大安田講堂攻防戦 その5



今回は1969年1月17日と1月18日の安田講堂攻防戦をめぐる新聞記事を紹介する。まずは攻防戦前日の様子から。

【あらゆる手使う 防衛固める安田講堂】朝日新聞1969年1月17日(引用)

『17日朝の東京大学は、一般学生の姿はほとんどなく、正門からイチョウ並木で、何に使うのかセメントのようなものをしきりに運んだり、立看板づくりを急ぐ反代々木系学生のヘルメットがゆれるだけ。正門や赤門付近でのピラ配りもない。「ダイナマイトやニトログリセリン、劇薬が大量に運び込まれた」とうわさされる安田講堂は不気味に静まり返り、かえって危機感を高めていた。(中略)

共闘会議の山本義隆代表は、17日午前10時すぎの記者会見で「われわれは入試を断固阻止する。7学部集会は認めないし、紛争の根本的な解決もせずに入試を実施し、あらたな学生を入学させることなど許されない」という。(中略)

「安田講堂を中心とする防衛体制は固まりつつある。18日には第2波の労学総決起集会、21日にはゼネストで政府、文部省、大学当局の闘争圧殺をはねのけていく」と激しい言葉を続けるが、“最後の瞬間”が次第に近づいていることを意識してか、その表情には思いつめたものがただよっていた。また、屋ごろ反代々木系学生約40人が、正門の外の歩道の敷石をはがし始めた。機動隊約100人が出動したため、学生たちは学内に逃げ込んだが、敷石800枚以上が学内に持ち込まれた。』

【警視庁、東大出動を決定 占拠学生を排除へ】朝日新聞1969年1月18日(引用)

『(前略)加藤一郎総長代行は17日午後11時、大学の許可を持たないものすべてに学外退去を求める「退去命令」を全学共闘会議(反代々木系)、東大民主化行動委員会(代々木系)に電話で通告するとともに、広報車で学内につたえた。(中略)

東大構内の代々木系学生は17日夜、拠点の教育学部本部からほとんど姿を消した。』

【“安田トリデ”死守の構え 逮捕覚悟で400人】朝日新聞1969年1月18日(引用)

『機動隊の東大導入が時間の問題となった17日夜、“完全武装”した安田講堂はヤミ夜に黒々とそびえ立っていた。深夜まで響くカナズチの音、コンクリートを砕く音、革マル派や各派幹部の大部分はすでに脱出、ろう城するのは逮捕覚悟の“決死隊”約400人といわれ「時計台を本丸にして。10日間は戦い抜いてみせる」と豪語する。警察の情報では講堂内にはニトログリセリンはないとわかったが、ダイナマイト、火炎ビンなどがあることが確認され、学生たちが玉碎的抵抗に出れば、惨事も起こりかねない。どうしたら死傷者を出さずに、要さい化した講堂を攻め落とすことができるか、警視庁は同夜おそくまで攻城作戦の秘策を練った。(中略)

いままで共闘会議の主要派閥だった革マル派は、講堂外の文学部校舎に移り、講堂にたれさがる各派の旗の中から革マル派は消えた。さらにこの派は他派と意見が分かれ、17日までに構内

から大部分が早大に移ってしまった。(後略)』

革マル派の安田講堂からの“逃亡”は、その後の他党派との対立の決定的な要因となる。明大・和泉でも1969年4月の時点では、まだ数人の革マル派が中庭でアジをしていたが、すぐに社学同に囲まれ論争に。4月の大衆団交でも数人の革マル派が記念館内にいたが、同じように論争で追い出されていた。その後、革マル派のヘルメットは見えていない。当時はゲバルトでなく、あくまでも論争での勝負だった。

東大闘争といえば本郷の安田講堂が注目されていたが、東大駒場では全共闘が窮地に

【共闘派、全く孤立 駒場の第八本部】朝日新聞1969年1月18日(引用)

『おびただし“武器”を運び込み徹底抗戦の構えをみせる安田講堂とは対照的に、東京・駒場の東大教養学部では全共闘(反代々木系)の拠点、第八本部は無党派、代々木系陣営の中で糧道を断たれ、落城寸前の“弧城”といった様相だ。(中略)

無党派、代々木系学生は15日の昼すぎ、第八本部に突っ込んで一部の封鎖を解いた際、電源やガス、水道の元せんを切った。周囲には昼夜ぶっ通しで見張りが立ち、中に立てこもった50人足らずの全共闘学生は、出ることも食料の運び込むこともできなくなった。

(中略)駒場共闘は全部で150人ぐらいといわれる。だが大半は15日、本郷構内での総決起集会に出かけ、帰ったときには駒場校舎を無党派、代々木系学生に“制圧”されており、現場に戻れなくなった。いまは近くの明治大学に身を寄せているとのこと。(中略)

全共闘シンパらしい学生の1人は「兵糧攻めなんてえげつない」とつぶやいた。』

1月21日、駒場の全共闘は第八本部から撤退。(ホームページの「全共闘機関紙」コーナーに東大全共闘機関紙「進撃」を掲載していますが、1969年2月4日号で駒場の撤退の状況が分かります)次回は1月18・19日の攻防戦の新聞記事です。

連載69 1969年1月 東大安田講堂攻防戦 その6



引き続き、1969年1月18日と1月19日の安田講堂攻防戦をめぐる新聞記事を紹介する。

【東大、警察力で占拠排除 安田講堂に突入】朝日新聞1969年1月18日(引用)

『(前略)警視庁は18日午前7時を期して放水車など96台の車両と機動隊員を学内に入れた。警視庁は、占拠学生の激しい抵抗を予想し、ヘリコプター、防石車、ガス弾1万発を用意するとともに、万一の事態に備えて学園紛争では初のピストル武装の部隊も編成した。(後略)』

【ガス弾うず巻く安田講堂 火炎ビンと投石の雨】朝日新聞1969年1月18日(引用)

『(前略)講堂への攻撃は午前8時ちょうどに始まった。警視庁のヘリコプターが1機、講堂の屋上すれすれに近づいていった。乗員がからだを乗り出し、手に持ったガス弾に火をつけてねらいをつけた。時計塔すれすれに旋回した瞬間、投下。屋上に落ちた。すぐに学生が走り寄って拾い、下に投落してしまった。ヘリコプターは何回も旋回してはガス弾を投下する。屋上を走り回る学生の中にスカート姿の女性もみえる。8時半ごろ、ケヤキやクスノキの木をタテに講堂に近づいた機動隊員のガス銃一斉射撃が始まった。講堂の屋根の上をガス弾が右に左に飛びかい、発射音とさく裂音がこだまして響き、くろぐろとそびえる時計塔はたちまち白煙に包まれた。広場から人は消え、誰もが物かげに身をひそめて屋上を見上げる。』

【10時間を越す攻防 安田トリデ“落城”せず】朝日新聞1969年1月19日(引用)

『(前略)18日、東大・本郷構内は機動隊の導入で工学部列品館、法学部研究室などにたてこもっていた学生は、次々と排除されていったが、反代々木系学生の最後のトリデ、安田講堂の学生の狂気の抵抗はすさまじく、火炎ビンと石は講堂前広場にたえまなくふりそそいだ。

石は風を切る音がするだけで、どこに飛んでくるのか全くわからない。10時間を越す攻防ののち、「危険」と判断した機動隊は実力排除を一時中止、講堂はついに1日中持ちこたえた。工学部列品館、法学部研究室での学生の抵抗はすさまじく、火炎ビンに機動隊めがけて投げつけるだけでなく、建物の一部にも放火するほどの過激さ。しかし、午後1時すぎ、列品館の学生が“降伏”すると、機動隊の主力は安田講堂へ。

その最も本格的な実力行使は午後3時15分にはじまった。まず警備車2台が、正門玄関車寄せに近づいたが、屋上から猛烈な火炎ビン攻撃を受けて退いた。最初は火を付けずにビン投げ、ガソリンを車のまわりに散らし、次に火のついたビン投げ、火を大きくしようという手口だ。

時計台放送がうわずった声で叫ぶ。「君たちがバリケードに近づくことを絶対に許さないぞ」。3時40分、決死隊が猛烈な投石の雨をかいぐって車寄せにたどりついた。援護のガス弾射撃がさらに激しくなり、空からは大型ヘリコプターが屋上の学生めがけて粉末ガスを撒く。3時55分、車寄せ

の短いヒサシのかげに身を寄せ合って、バリケードこわしに懸命の隊員の背中に火炎ビンが落ちた。炎をまともに受けた隊員の背中が、激しく燃え上がった。さいわい、火はすぐ消えた。

この間、裏口の用務員室の窓から機動隊員が講堂に突入した。しかし、夜がせまっている。放水でぬれ、夕やけに染まって輝いていた時計台が、夕やみの中に沈みはじめた。「もう一息だ。早く、早く」と、機動隊員の間にあせりの声も出る。投光器の光が時計台を照らした。しかし、飛んでくる石はもう見えない。屋上や窓に現われた姿などから判断してわずか100人ほどがたてこもっているだけの“安田城”はついに1日では落ちなかった。』

【東大封鎖すべて解除 安田講堂も制圧】朝日新聞1969年1月20日(引用)

『18日早朝から東大・本郷構内で反代々木系学生の占拠排除、学内捜索に乗り出した警視庁機動隊は、19日も約3000人を動員、午前6時すぎから安田講堂の反代々木系学生の排除を再開した。占拠する学生の抵抗は激しく、各階に通ずる狭い階段にはロッカー、机、イスなどで厚いバリケードを築き、投石、火炎ビン、竹やりなどで警官隊に立ち向かった。

これに対し、機動隊は投石よけの即製渡り廊下を講堂内につくり、講堂内でもガス弾を多数発射、ロープや電気ドリル、切断機を使ってバリケードを次々に撤去した。正午ごろには2階にいた30数人を、午後3時半すぎには、3、4階の講堂内にいた200数十人を不退去罪、公務執行妨害などで逮捕した。

しかし、このあとも一部の学生は時計台のある塔屋や屋上にたてこもり最後の抵抗を続けたが、午後5時半すぎ機動隊は塔屋部や屋上にはいることに成功、残りの学生を逮捕し、封鎖を解除した。同講堂の封鎖解除は昨年7月2日の再封鎖以来半年余ぶりである。(後略)』

今回は安田講堂攻防戦外伝です。

連載70 東大安田講堂攻防戦外伝 攻撃者たち



1月から東大安田講堂攻防戦の籠城学生の様子や新聞記事などを紹介してきたが、攻め手である機動隊員へのインタビュー記事が朝日ジャーナルに掲載されているので紹介する。

【TPO '69 機動隊員たち】朝日ジャーナル1969年2月9日号(引用)

『60年安保から東大へ。“鬼”とよばれる機動隊。2日間延べ13,500人を動員した安田講堂の攻防戦。各所にたむろする青ヘルメット。上級者と共にいる時は絶対口を開かず、仲間同士少人数で巡回、警備の時、ようやくナマリが多い、重い口調で。平隊員平均年齢26歳。小雨の合間。

—東大の感想は—

A わたしは外での衝突ばかりだったので構内にはいるのは今日始めて。広いなあ。それと、破壊が予想以上ひどい。

B ひどいもんだった。(タキ火をかきたてながら)こんなにタキモノが出るほどだからなあ。これは別に掃除をしてやっているんじゃない。ただ警備しているのは寒いからねえ。

—衝突で一番怖かったのは?—

C やはり投石。どこから飛んでくるかわからんからなあ。火炎ビン、たいしたことない。角材もまあ怖いといえば怖いが(同僚の顔を見ながら)、まえ見えているので防ぐ手段はある。

D 学生たちの戦術がだんだん拡大してゆく傾向がある。(ちょっと上を見て)わたしのすぐそばでも隊員が3, 4人やられた。投石だ。2人は重症らしい。

—学生たちをどう思うか—

A さあ(沈黙1, 2秒)なんといったらいいかなあ(同僚を見る)

E 世間でみんな“学生さん学生さん”とっているから、まあわれわれも学生さんとは思っているけど……。

F 学生は学生だろうが、われわれと衝突する時の行動なんかは、やっぱり学生らしくないといっているいな。

—家族の反響は—

B 私は関西の田舎の出身だが(目がやわらぐ)衝突があるたびに、気をつけろケガするなといってくる。こう事件がつづくと返事も書いてられないしねえ。

G(毅然として)私の所へは手紙なんて全然こない。家族も親戚も一応覚悟してるから(声を落として)まあ帰郷の時はよくいわれるが、テレビなんかでこっちの情勢がすぐわかるから心配するんだ。

—体力、気力の自信は?—

E 安田講堂封鎖解除開始以来、ずっと1日、2, 3時間の睡眠。疲労はしてるんだが、やはり興奮してるのかなあ。

A (ブ然とした表情で)自分でもよくこれだけ体力つづくと驚いてしまう。

C 本部からの給食じゃ、やはりこれだけの重労働には不足だ。

D みんな小遣いでパンを買ったりしてるんだ。(口辺だけの笑いで)まあ、出勤の時は多少小遣いも多くれるからいいけれど……。

E いくら小遣いをくれても、やはり衝突はないほうがいいよ。

A 闘志っていうが(困惑した表情)簡単にはわからないものだ。こっちから手をだしちゃいけない、防御第一ってことでもあるしね。』

攻め手の機動隊員の素顔がチラッと見えるようではあるが、インタビューなので公式的な発言に留まっているような印象を受ける。

彼らも攻防戦では個人の“機動隊員”から組織としての“機動隊”という暴力装置に組み込まれ、防御第一という建前を捨て、ガス銃を武器に激しく攻めこんでいく。

【失明や口蓋破裂 ガス弾当り重傷者続出】朝日新聞1969年1月19日号(引用)

『18日の東大構内での反代々木系学生排除の際、機動隊のガス弾が顔にあたり、このため目をえぐられたり、くちびるが裂けた重症の学生5人が出た。

ガス銃撃は医学部中央館屋上でまず始まり、塔屋の学生に百発近いガス弾をあびせた。(中略)ガス弾は長さ約20センチ、直径約4センチ、プラスチックの弾体の先端に木部と長さ約1センチの

鉄パイプがついている。重さが約150グラムあり、20メートル離れてベニヤ板を打ち抜くほどの威力。

警視庁は「仰角30度に、できれば50メートル離れてうつよう指導しており、直撃させたことはない」といっている。』

また、東大全共闘機関紙「進撃」では

【進撃1969年2月20日号】(引用)

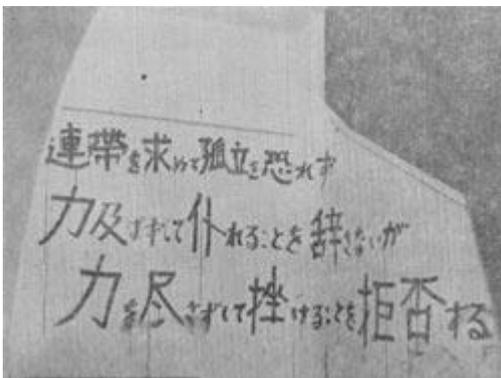
『機動隊が使用したガス弾射撃は、明らかに15メートルから20メートルの至近距離から機動隊指揮者の「顔をねらえ」という命令に応じて水平射撃されている。』

『逮捕者は講堂や屋上で手錠のまま機動隊員に鉄パイプや棍棒で1人1人なぐられ、ガスを抜いたガス弾で至近距離から顔面をねらい打ちされるという蛮行を受けた。』

1月18日の新聞の夕刊には「ねらい撃ち 工学部列品館屋上にたてこもる学生に、法文1号館屋上からガス弾を打ち込む機動隊員」という説明文とともに、ガス弾水平撃ちの写真が掲載されている(写真は朝日新聞から転載)。

写真は事実を語っているが警察は認めない。建前と実際の現場における事実との間の大きな落差。攻撃者の論理である。

連載71 東大安田講堂攻防戦外伝 連帯を求めて孤立を恐れず



大学ゲリラの唄 —落書東大闘争—(三省堂新書・1969. 5. 20発行)という本がある。

当時、東大農学部助手であった岡本雅美氏と村岡行一氏が採集した東大闘争に関する「非論理的」な資料をまとめたものである。「非論理的資料」とは、ビラ、落書、替歌などである。

本のあとがきには「己の情念や理念を十分に表現しうる言葉を、いまだもちえぬ者たちが、既製の理論的な言語や

枠組みを盗んで語るとき、理論的表現のもたらす普遍化、定式化に蚕食されてかき消えてしまう何かを、この書に採録された詞文から読みとられることを願う」とある。

今回は、そのうち落書編を紹介する。写真は、かの有名な「連帯を求めて孤立を恐れず 力及ばずして倒れることを辞さないが 力を尽さずして挫けることを拒否する」という落書の写真である。では、この本から安田講堂内のいくつかの落書を見てみよう。

【大学ゲリラの唄】(引用)

『○永続的 非妥協的バリケードを構築せよ！

○君もまた覚えておけ 藁のようにではなく ふるえながら死ぬのだ

1月はこんなにも寒いのが 唯一の無関心で通過を企てるものを 俺が許しておくものか

○団交は一般的に暴力を意味しない 大衆の確認の中で行われるからだ！

敵対者(人民と支配者)が対等でない時の戦う人民の表現形態にすぎない。

○悪魔も寄りつかぬ静寂の中で ドン・キホーテは夢を見ていた
しかし僕等は自己を主張するに不可欠なハンマーを見ている
反革命分子よ 気をつけるがいい
血と肉をもった存在が今や 鉄槌なしには主張され得ないのだ

○万国の労働者 被抑圧人民団結せよ！

世界に新しい共産党をつくれ

○東大・日大は連帯して闘うぞ！

日共・民青の反革命粉碎！

○静寂は闘いの中に 平和は闘いの中に 秩序は闘いの中に

○真黒に汚れた手の中に ごそごそめぐりこむ硬いベットの上に 僕達は革命の夢を見る

○戦闘的な社学同の同志よ 反戦青年委員会は 君達と共に最後まで闘う

○俺は行くぞ！！ 重い！重すぎる

軽くするために行くんだ 遠くまで行くんだ 己のために 君の為に

○女性の自立をめざして 日本女性解放同盟は死ぬまで闘うぞ！！

○ローザの心は革命の心 おせばパトスの泉わく

社会主義の情熱と人間的感性 それが革命の生命なのです

○中核の部隊は最後まで勇敢に戦い抜くであろう。だが我々は玉砕の道を選んだのではない。我々の後に必ずや我々以上の勇気ある若者たちが、東大において、いや全日本全世界において、怒涛の進撃を開始するであろうことを固く信じているからこそ、この道を選んだのだ。そうだ、我々はみずから創造的人生を選んだのだ。

中核第二軍団第五小隊

○とめて下さいお母さん 背中の銀杏も笑ってる 女々しき東大 どこへも行けない

○労働者諸君 学生はここまで 後は君達の出番だ

○未来を怖れて現実を避ける君 君に未来はない 君に現在がないから

君には現在も未来もない 君にはLifeがない 君の腕の時計の針が回るだけ

君にあるのはそういう君だけ 君に見えるのはそういう君だけ

君がするのはそういう君を守ること

○運命のままに生きることを拒否し 新世界を求めてぼくは旅立った

もとより幻想など持たぬから 困難に直面しても悲愴にもならず

英雄を気取ることもなかった この歓喜の合唱のための闘いを

未完成に終わらせてはならない(駒場第八本館)』

バリケード内の落書は東大に限らず、どの大学のバリケード内でも見られた光景である。

明大のバリケード内も壁のいたるところに落書や党派のスローガンがあふれていた。

国鉄のストの時にも電車にスローガンがペンキで書かれていた。当時はスローガンと落書の時代でもあったのだろうか。

明大のバリケードの中で「孤立を求めて連帯を恐れず」という落書を見かけた。「連帯を求めて孤立を恐れず」のパロディーみたいな落書であるが、1970年以降の闘争の先鋭化や内ゲバを予想したような落書だった。

安田講堂攻防戦以降の闘争の後退戦の中で、党派を中心に、70年安保闘争に向けて闘争の質的な発展を図るためには、安易な連帯を拒否し、闘う強固な組織を作っていこうという流れがあった。そういった流れの中で闘争の先鋭化と孤立化が進み、果てしない党派間・党派内の内ゲバという呪縛へと落ち込んでいく……。

そういった時代の予感を的確に表した落書といえよう。

でも「孤立を求めて連帯を恐れず」には賛同しない。やはり「連帯を求めて孤立を恐れず」が正しいと思う。それが全共闘運動の精神だから。

No273 東大安田講堂攻防戦外伝 報道機関は何を伝えたか



今年、東大安田講堂攻防戦から44年目。4年前の1月のNo64からNo71で「東大安田講堂攻防戦」を書いたが、その続きである。1969年1月18・19日、東大安田講堂攻防戦が行われた。

安田講堂攻防戦の様子は連日新聞の1面で取り上げられ、テレビでも生中継された。報道機関は読者や視聴者に何を伝えたのだろうか。安田講堂攻防戦のテレビの生中継についての興味深い記事があるので紹介する。

(写真は毎日グラフより転載)

【固定したカメラの目 安田講堂攻防戦のテレビ報道について】法政大学助教授 佐藤毅
サンデー毎日 1969.2.20 増刊号(引用)

『<異常に高い視聴率>

1月18・19日の2日間、東大安田講堂をめぐる“攻防戦”があった。テレビ各局は、この事件をめぐって、18日午前7時の機動隊導入いらい、定時のニュースのほか、次々と報道特別番組を組み、東大構内からのナマ中継を行ったものである。

ちなみに、18、19日の2日間の東大関係番組の放映時間は、NHKが11時間、TBSが9時間、NET(現テレビ朝日)が6時間、日本テレビが5時間50分、フジテレビが2時間40分にのぼったという。

大量な機動隊の導入に匹敵する大量なテレビのナマ中継と特別番組の投入。これはいったい、何を意味するものであったろうか。(中略)

18、19 日の両日にわたるナマ中継を一言でいえば、圧倒的に迫力のある画面であったことはたしか。あらためて、テレビの特性はナマ中継による同時性であり、臨場感であることを人々に決定的に印象づけたといってもよい。

あまりの迫力に、中継がとだえると、あわててチャンネルを切り替え、どこか放送している局はないかと捜しまわったという視聴者はザラである。

視聴率は NHK の 44.6% (18 日午前 8 時) をはじめ、各局とも軒並み異常なはねあがりを示したという。

<国家権力の側から>

(中略) テレビ映像はまず、さまざまな解釈の可能性を整理しないまま大衆に提示する。そのことによって、事件の認識や評価をまず大衆自身が行うことができる媒体である。

が、この両日のナマ中継によるテレビ映像は、その焦点を多分にフィクショナルな“安田トリデ攻防戦”に一義的にしぼることによって、興奮のルツボをつくりだし、それをクッションにして、多様性というテレビ映像のすぐれた特性を殺していった。

この日のナマ映像は、さしあたって、火炎ビン対ガス弾、隠し砦対水攻め、危険薬品対ヘリコプター、投石対トロイの馬・・といった発想図式の中にあって、そこにドラマ以上の、また、プロレスやキックボクシング以上の迫力ある興奮をもたらそうとした以外の何者でもないといわれても仕方ない。

これでは東大に警察力がはいったことの意味はふっとんでしまう。(後略)

<一義的映像と一義的発言と>

ここに、この両日のテレビ映像が、単なる興奮を視聴者にもたらしただけではない、重大な意味が隠されているように思う。それは視聴者の興奮をテコにして、カメラの目を機動隊や国家権力の目とだぶらせ、そのことによって、視聴者の目をも一義的にそこにおとしこんでいく危険性をもったといつてよい。(後略)』

固定したテレビカメラの目に代表される報道機関の姿勢は、その後の「浅間山荘事件」の報道にも引き継がれ、解釈の多様性を自ら放棄した一方的なものとなる。

一方、世界各国のメディアはどのように伝えたのだろうか。

【各国でも大きく報道】朝日新聞 1969 年 1 月 20 日(引用)

『<反米闘争の発生を憂慮 米紙(ニューヨーク 林特派員 19 日発)>

東大闘争は 7 学部集会以来、ニューヨーク・タイムス紙などにかなりくわしく報道されており、19 日の朝刊では安田講堂をめぐる警官隊と共闘派学生との攻防戦について「学生らなおも包囲に屈せず」という見出しで、約 2,000 語をついやして事件の成り行きがこまかく報じられている。米国でもスチューデント・パワーは全国的な大問題だけに、一般の関心は少なくない。(中略)

18 日のニューヨーク・タイムスは、学生側に「造反有理」という毛沢東中国主席の言葉が盛んに引用されていることを引き、闘争の結果よりも闘争自体に焦点が置かれ、権力につながるエリート養成校としての東大の権威を失墜させようとする破壊的な意思に、学生たちの真骨頂があると述べている。

<革命的人民の士気を高める 新華社 (中国通信=東京)>

北京 18 日発新華社電は東京からの報道として、東大紛争の模様を次のように報じた。

『佐藤反動政府は 18 日午前、1 万人に及ぶ完全武装の警官と数十台の装甲車を派遣して東大に侵入し、進歩的學生に野蛮な弾圧を加えた。學生の闘争は、日本の革命的人民の士気を大いに高め、米日反動派の威風を大いにたたいた。』

新華社の論評は 44 年という時代の隔たりを感じさせる。当時は毛沢東主席のもと、紅衛兵が「毛沢東語録」をかざしながら天安門広場を埋め尽くしていた時代。

今は「改革開放」という名の下で、「赤い資本主義の国」となっている。(終)

No324-1 東大安田講堂攻防戦外伝「1.19 と私 野坂昭如」



今年は1969年1月の東大安田講堂攻防戦から45年目となる。神田カルチュラタンからも45年。この時期になるとブログに「東大安田講堂攻防戦外伝」を掲載しているが、今回は「サンデー毎日」に掲載された野坂昭如氏(作家)の記事を掲載する。

(文書が長くブログの字数制限を越えるため、No324-1 と No324-2 に分けて掲載します。)

(写真は「サンデー毎日」1969.2.20 号より転載)

【1・19 と私 野坂昭如】(サンデー毎日 1969.2.20 号)(引用)

『1月19日午前六時半、近くに住む週刊記者A氏が迎えにきた。この日、東大構内へ入るには、報道の腕章が必要で、それを貸してもらうべく、また、ぼくは警察機動隊のそばへ近づいたことがこれまでなく、A氏は安保改定以来、羽田、新宿とたびたび経験しているから、今日の先達とたのむ気持ちもある。(中略)

赤門前の、隊員の列を分けて、構内に入る。職員と腕章を付けた老人が一人いるだけ。道を横切って、ふくらみきった太いホースが五本延びている。歩くにつれ催涙ガスが眼にしみるが、そのよどみ方はきまぐれで、涙が出たりひっこんだりする。映画の撮影現場の如く、安田講堂の周辺だけが、放水投石怒号でごったがえし、ほんの二百メートルはなれると、大学構内日曜の朝にふさわしく、深閑としずまっでいて、なにやら現実感がうすい。

(中略)NHKの腕章がやたら目立ち、トランシーバーで連絡をとりあっている。後詰めの隊員が、

アルバムに貼られた、学生活動家の写真をながめている。放水は水圧の関係か、二、三分勢いいいが、すぐに老人の小水の如く、しぼんでしまう。(中略)大型ヘリコプターがドラム缶のようなものを吊り下げ、飛来して、催涙液を散布する。こちらまでしぶきがとんで、眼が痛い。

「ああ、ヘリコプターよりの催涙液は、さして効果なく、かえって地上に被害ある故、中止されたし、どうぞ」「了解、なおこの交信は傍聴されているおそれあり、気をつけるように、どうぞ」「わかりました、どうぞ」隊員の一人が、大型トランシーバーで連絡をとる。

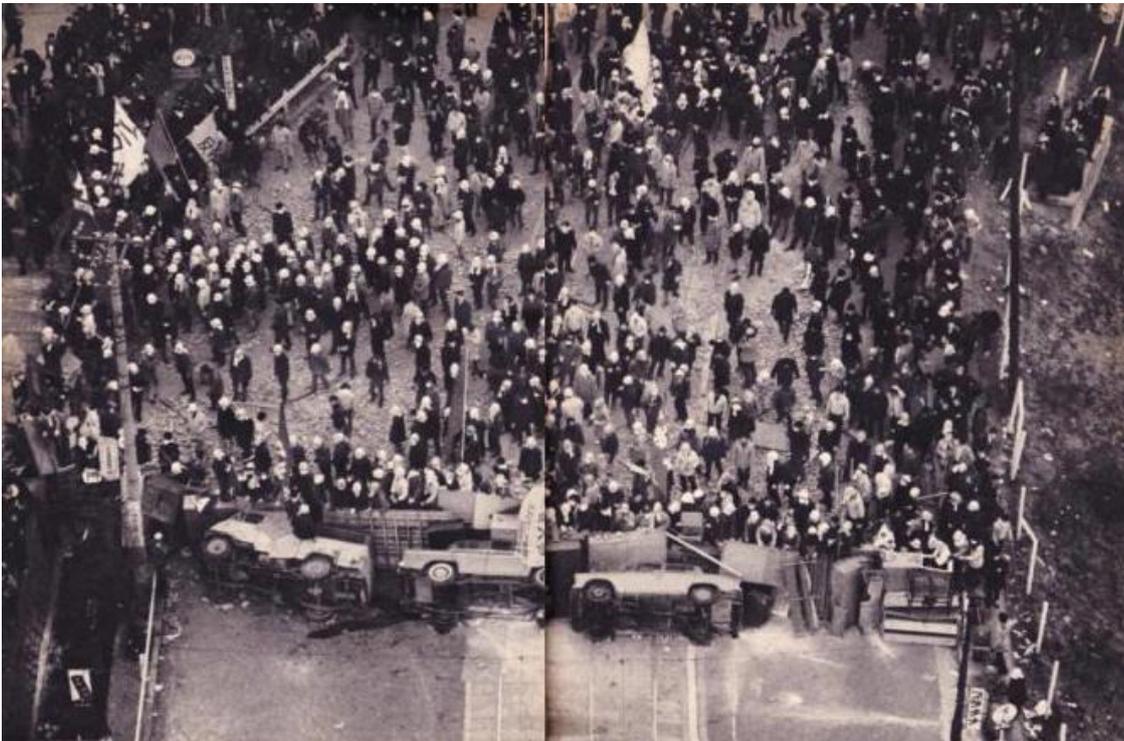
ヘリコプターは二度、三度まわって、今度は、乗員の一人が、ねらいさだめて、催涙弾を投下する。(中略)

お茶の水に向かう。本郷三丁目を中心に、おびたしい機動隊がいて、通行人も歩道いっぱいにあふれている。立ち止まることは許されず、中にはあからさまに文句を言う男がいる。お茶の水駅の近くで喫茶店に入る。明治大学の通りは、商店すべて店を閉めているが、横丁は、シャッター半ば降ろしながらも、営業し、A氏に注意されて、みると駅前の交番が、打ちこわされ、中からおびたしい水が流れ出ている。コーヒーいっぱい飲んで、中央大学へ向かい、ここも、ここも門をバリケードで固め、人一人ようやく通れる入口からのぞくと、ヘルメット姿の学生が、いわゆる集会中で、十人、二十人と少数ながら、旗押したてた連中が、つぎつぎと吸い込まれ、入ろうとしたら、「闘う意志のない者は、駄目」と、さえぎられる。フランス人記者があらわれ、やはりフランス語で断りをくう。(中略)

また東大へもどる。(中略)目にみえる、屋上の投石者たちはまだいい、くらがりの中で、絶対に勝ち目のない闘いどもうとする若者は、なにを心の支えとしているのか、ぼくは、よほど、安田講堂に籠城しようかと、考えた、機動隊の側からばかり見ているのは片手落ちで、全共闘と共にいる、たとえば報道関係者がいてもいいはず、いや、当然必要であろう。籠城側がゆるさなかったのかもしれないが、このおびたしい腕章の群れを見ると、不思議な気がする。(中略)指揮者が、マイクで放水の目標を指示する。左側の屋上に、男が仁王立ちとなり、なにかしゃべっているが、ききとれぬ「かえりたまえ、すぐ、立ち去れ」とだけわかり、自分にいわれているようで、まともに男を見られない。なんのために、ぼくはここにいるのか、いやしくも全共闘支持を、たとえ心情的共感にしろ、ゆるぎないはずなのに、「頑張れ」と、声ひとつかけられない、機動隊が怖いのだ。(中略)

ふいに、時計台右側の窓から、スピーカーがあらわれ、男の声でしゃべりはじめる、よくききとれない。放水車がスピーカーを狙うがとどかぬ。スピーカーは赤い布団でおおわれている。「お茶の水で、バリケード構築中の学生が一人死んだ」報道の一人がいう。「しばらくこのままですね。もう一度お茶の水へ行きましょうか」A氏が提案し、腹が減ったからにぎり飯をほぼりつつ、本郷三丁目を過ぎて、ふと前方を見ると、道いっぱい群衆がいて、十字路になった角の、ガソリンスタンドを中心に、二方向で楯をかまえる機動隊と、対峙している。(No324-2に続く)

No324-2 東大安田講堂攻防戦外伝 「1.19 と私 野坂昭如」



(No324-1 の続きです)

(写真は「毎日グラフ」1969.2.15 号より転載)

たまに石が投げられ、とても届かなくて、両軍の中間におちる。「直ちに退去しなさい、石を投げたはいけない、こら」切り口上につい感情がまじって、指揮車の、金網の中でマイクがさけぶ、「各人投石者を確認の上、逮捕せよ」しごく無表情な声がひびいたかと思うと、突如、隊員の列は、我がちにときの声をあげ、催涙弾を発射しつつ、駆け出して、口々に「この野郎」「ぶち殺すぞ」「ふざけやがって」示威なのか、恐ろしいつぶやきをもらし、もとより群衆、あつという間に、横丁に逃げこみ、退き、すると、「中隊現在位置にもどれ」また命令があって、いとあっさり引きかえす。私服が背の高い男を両脇から固めて連行し、男は重病人のように頬あおざめていた。

報道の腕章にものをいわせて、機動隊の列戦を突破し、群衆側にうつると、そのすぐ後にバリケードがあって、全学連各派の旗が、ならんでいる。バリケードの内側では、闘士たち、敷石をはいで打ちつけ、投石の準備に大わらわ。両側の塀に見物人が鈴なり。あちらこちらに、派ごとの小集会があって、氣勢をあげ、お茶の水駅を中心にして、あらゆる道がバリケードで封鎖されているのだ。とんまな車が近づくと、まず二人ばかり、すごい剣幕で怒鳴り立て、それを一人がなだめて、運転者に丁寧の説明する。これはどうも、やくざの手口に似ていて、計算の上のことだろう。さきほどの喫茶店も表を閉め、交番に、解放区の札がかかる。

さまざまなデモの隊列と、色とりどりの旗が錯綜して、それとまるで、水と油の感じ、着かざった娘や、子供連れの父親、恋人が、楽しそうにながめている。なにやら、お祭りめいていて、たとえばここに機動隊が押し寄せたら、大混乱となるだろうに、毛ほども心配していない様子。ぼくは、歩きな

がら、常に逃げ道を考えているのだが、よほど、臆病にできているとみえる。(中略)(再び東大へ向かい、落城後、お茶の水へ向かう)

学生の数を、ラジオでは千五百人と聞いていたが、とてもそれではきかぬ。加えて何万かの弥次馬、まともにぶつかれば、大混乱となるだろうし、どうせ危ないとみれば、いち早く逃げ出すにしろ、この目で見ておきたい。さっきまでやりあっていたガソリンスタンド近辺、すっかり平穏になって、激しく車が行きかい、さらに医科歯科大横のバリケードもなくなっている。弥次馬だけが右往左往して、機動隊もどこにひそむのか姿がみえぬ。

戦線がのびすぎたと、バリケードをお茶の水駅近くに移し、それだけに内側は、ごったがえす騒ぎで、おどろいたことに、まだ子供連れの男、老人がうろうろしている。「私服の野郎けとばしてやった」「いやあ、さっきは、俺のこの肩のところにまで、機動隊の手がとどいてよ、びっくりしたのなんの、聖橋まで走って、足ががくがくよ」先のとがった靴、野暮ったい身なりの若者が、楽しそうにいう。ぼくは駿河台下のバリケードまで歩いて、いざとなれば山の上ホテルへ逃げ込むA氏との約束、ホテルのバアへ立ち寄り、ウイスキー二はい飲んで、さすがに人気のないロビー、今、見てきた東大の、TVニュースをながめ、さてと、もう一度表に出たら、なんと、学生はすべて消えていて、一般群衆ばかり、明治大学近くに群がり、バリケードはあっさり突破されたらしくて、お茶の水駅に、ジュラルミンの楯がならんでいる。声も出さず、石も投げず、ただ、機動隊とにらめあうだけで、二度、三度、隊員が突っこんでくるが、いったんは逃げても、すぐに元通り、道いっぱいにはだかり、異様な静けさのままいる。これは機動隊にとってもかなり気味のわるいものではないか。午後11時をまわった頃、群衆は、ふいにやめたという風に、遊びにあきたといった態で、ぞろりぞろり帰りはじめ、その後は、投光器に照らし出された路上、無数の石ころが、それぞれ影を抱いて美しい模様をえがき出していた。中央大学のバリケードは固く閉ざされ、日大は窓から食糧を運んでいた。山の上ホテルで飲み直すつもり、坂を中途まで登ったら、二十人ばかりの隊員が駆足で追いつがり、思わずたちすくんだら、かまわず追い抜いて、ホテル横のバリケード撤去にかかり、ものの三分とかからず、道をあげ、たちまちまた、黒いつむじ風のように坂を駆けおろる。

機動隊は、たしかに、市民対し、無敵の強さを持つ、あれは強すぎるのではないか。「デモといっても近頃は、すぐサンドイッチにされて、護送されてるみたいなものですからねえ」A氏がつぶやいた。サンドイッチのハムほどの、自由、戦前のパンばかりよりはましだけれども。』

(終)